

沖縄週間報告

6月21日(金)〜24日(月)まで、沖縄の旅に初めて参加した。旅として訪れるには余りに短絡過ぎたと感じるに、時間ばかりが過ぎた。建物の屋上から初めて嘉手納基地を目にした。柵の向こうは長い滑走路が一本伸びていて、大きな格納庫らしき建物等が並んでいる。一方、柵のこちらには、車や人が普通に行きかっていた。次に訪れた「ガマ」。沖縄戦時、島民の方々が難を逃れるための自然洞窟である。



この夜「沖縄、今何が起きているのか」と題して沖縄国際大学教授前泊博盛先生が講演され、日米地位協定・思いやり予算・機密文書と重い話を淡々と話された。次の日、先

生の勤務先でもある沖縄国際大学構内にヘリコプターが墜落した現場を見学した。大学の近くには、普天間基地があり、そこにはオスプレイが羽を休めている。この基地は、町の中央にあり、柵の外側は住宅地が隣りあっている。この環境の中での事件・事故だったのかとこの場所に立って思った。この基地を辺野古へ移転すれば危険からは解放されるものの、一方の辺野古はどうなるのかと。

沖縄の現状を知り尽くされている赤嶺さんからお話を伺った。休むことなく現状を熱弁される姿は、伝えたいことと限らないものを感じた。体育の授業中の子供たちのいる小学校の校庭に、ヘリコプターの窓が落ちたこと。この事件後暫くヘリコプターは飛ばなかったが、小学5年生の女の子が「どうせ、飛ぶんでしょ」と呟いた、と怒りを込めて話された。その後、雨の中を小学校の校庭に設置されたシエルターを見学するも、あまりの粗末なものに絶句した。雨宿り場にしか見えな

い。我が子がこの学校に通っているのも設置者は、これでよしとするのかと怒りを覚えた。こういった現実を見聞きし、その空気に触れなければ沖縄を理解するのは難しいと感じた。

と感じた。

この旅でもう一つ見たことは、宿泊先であった愛楽園のことを知ったことだ。入居者の多くは、ハンセン病にかかったから隔離されるのではなく、周りの目から逃れるためにこの地まで来たと言われた。園内の宿泊施設は、面会者用として用意されたとのこと。会っても一緒に食事することも叶わなかったのは、と思わずにはおれない。先日、国は控訴を受け入れた。これで終わったわけではないことを皆が感じて欲しいとともに、未だ愛楽園で過ごされている多くの方々に寄り添い、手を差し伸べる業を私たちに与えて欲しいと願った。

(栗栖直美・
広島復活教会信徒)

聖モニカ礼拝堂 聖別式

去る2019年7月6日

(土)に日本聖公会広島復活教会聖モニカ礼拝堂の聖別式、及び聖モニカ幼稚園の落成式が行われました。当日は、教区主教、歴代教役者や教区内の教役者、教区内外や近隣の他教派の教会から、また幼稚園関係者の皆様や工事関係者の皆様を合わせて、概ね20

0名近くのご出席をいただき、聖モニカ礼拝堂と聖モニカ幼稚園の新しい出発を共に祈りました。

この聖モニカ礼拝堂がこの地に献堂されたのは、今から約49年前の1970年4月29日のことで、八代斌助主教によって聖別式が行われました。また、その時にはカンタベリー大主教の代理として、日本各地を巡回しておられた、スコットランド教区のハウ主教も臨席なさり、この日に堅信を受けられた方々を祝福して、新しい礼拝堂が献堂されたことの喜びとこの堅信の喜びとは全世界の聖公会にとっても喜びである、とお祝いの言葉を贈られた、と言うことでした。



その後、この礼拝堂では広島復活教会の歴代の教役者や

宣教師によって礼拝が守られ、たくさんの方々が生まれ、たくさんのクリスチャンが誕生してききましたが、近年、聖職者の減少によって、この礼拝堂での礼拝が守れていない日が続きました。それには、日曜日に礼拝する、という伝統に雁字搦(がんじがら)めにされてしまっていたことも一つの理由だったのかもしれない。

そこで、この度の聖モニカ礼拝堂の改築計画が始まって以来、2017年1月より聖モニカ礼拝堂では土曜日に礼拝を守り始めました。改築期間中は、聖モニカ幼稚園のホールをお借りして礼拝を守り続けてきました。これから当時の広島復活教会の中道淑夫司祭や嶋田克己執事、そして諸先輩方が相謀って、この聖モニカ礼拝堂と聖モニカ幼稚園とを建築した目的、それは広島復活教会の宣教のひとつの拠点とする、という目的を継承しつつ、他方では時代や社会に併せられる様々な模索を続けながら、神様の栄光を現す器として、神様と地域社会の人々に仕えて参りたいと思います。今後とも皆様のご加禱、ご支援の程よろしくお願いいたします。

(司祭長田吉史・
広島復活教会牧師)